



ディオニュソスと従者 綴織・浮糸織裂

亜麻・羊毛 37.0×45.0cm エジプト 4-5世紀

### ◆◆館蔵品紹介◆◆

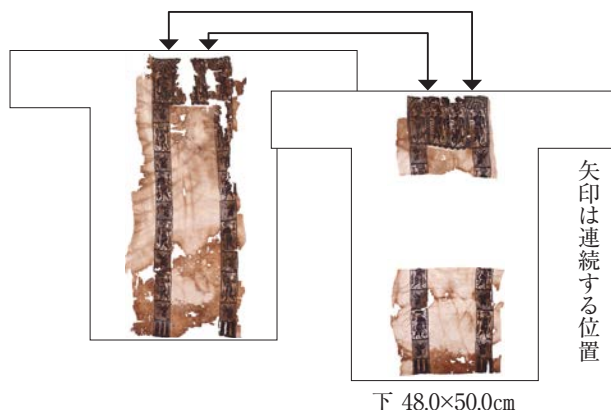
ただ今開催中の「エジプト古代染織コプト裂100点」で展観している推しの作品を紹介します。

この人物と動物文様を表した布裂は、もとはチュニクという袖付貫頭衣つづれおりの一部で、綴織(英語で tapestry weave)という技法で織られました。エジプトの職人がたてばた堅機をつかって、緻密な模様を織りあげたのは4~5世紀です。1500年も前のこととなります。

乾燥地帯のエジプトであったため、染織品が朽ちることなく残ったことは、ただ驚くばかりです。

2世紀末のころに広まったキリスト教に入信したエジプトの民(コプト人)が着た衣料には、発注者の好みと織手の表したいイメージが合わさって、いくつかの流行がうまれました。本作のようにギリシア神話のディオニュソス神も人気の意匠の一つでした。

どうしてキリスト教徒の染織に、しかもエジプトにギリシアの神が現れるのか。エジプトは紀元前305年よりギリシア系プトレマイオス王朝に支配され、ヘレニズム文化が栄えます。その後、前30年からはローマ帝国属領で、キリスト教徒は受難の時代が続きました。313年にミラノの勅令でキリスト教が公認されても、宗派对立や教義論争が続き、

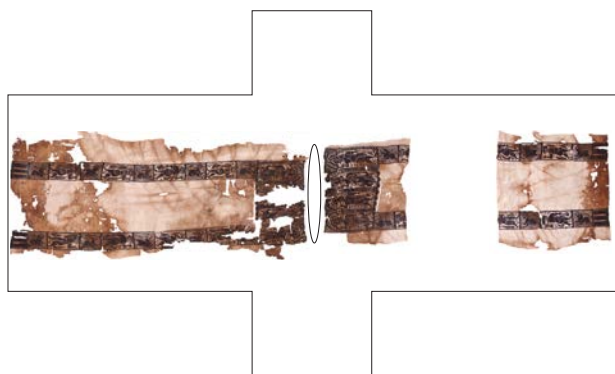


まだキリスト像を表すことが禁止されたため、酒神ディオニュソスなどのギリシア神や人物像を織り出して、その代わりとしたともいわれます。

さて、本作は1領のチュニックであった大小3枚の裂からなっており、前項の上の図版が胸飾り、裾にあたる部分が右下図で、左側が上下両裂の反対面に当たります。このチュニックは頭を通す穴の形に前後部の区別はなく、装飾も全く同じ模様で、前身頃と後ろ身頃を示す使用痕跡もありません。

これらコプト織の衣料は、着装者が亡くなった後に副葬されたものです。中には畳まれて納められていたものもあったようで、愛用の服であったのでしょう。これらが19世紀末に発掘されました。そしてそれらに興味を抱く愛好家が出たために次々と盗掘されて、模様のない地で滲みが出た部分は切り捨てられ、模様だけの断片にされて美術市場に出まわるといって、宜しくない歴史がありました。1900年のパリ万国博覧会にも出品され、活動しはじめたマチスなどのアーティストから注目されて、欧米の愛好者が増えていきます。日本には大正時代後期に入ってきます。

それでは、縦機を用いた綴織の技法を大略します。機はたの上下2本の横木の間に亜麻の経糸たていとを垂直に張り、緯長よこながの十字型に身丈2倍260cmの広幅で、下方の袖口から身頃を織り進めます。肩は連続し、首回りの開口部が入ります。数人の職人が分担して作業し、染めた羊毛の緯糸を引き返しながら模様を織り込みます。表側からの作業ではなく、糸の始末をするために裏側から織るため、模様は前後、左右反転した図柄になります。大変な手間がかかり、複雑な文様では1日で数センチも進みません。織り上げた後袖下と両脇を縫って完成します。



表紙の上図をご覧ください。列柱にアーチをいただく4つの壁龕へきがんが設けられ、それぞれの柱間に、着衣の男女が1人ずつ配られています。いずれも右手を挙げ、男はもう片方の手に葡萄の房のつく蔓茎を握り、女は下げた手で衣の裾をつまんでいます。葡萄はワインの原料ですから、男性が酒神ディオニュソスであることは間違いなく、女性

はその妻アリアドネと思われます。夫婦が2組繰り返されているのは強調するためか、胸飾りの巾にバランスよく収めるためなのか分かりません。顔と手の向きは同じでも、ディオニュソスは腰をひねってなぜか反対方向に進みます。

類似例にあるような頭の後の光背がないので神性の表現は強くありませんが、2人が位置する壁龕は、建築用語でニッチ(niche)といいます。内外の壁に凹状に設けられて、上部に半ドームがつき、彫像、噴水や花器などを飾りました。教会堂などでは神聖な空間ですので、特別対応です。

ギリシアのディオニュソス神は、ローマ時代にはバックスの名で崇拜されました。有名なポンペイの秘儀の間の大壁画からも篤い信仰の様子がうかがえます。ディオニュソス信仰はエジプトでもオシリス神と同一視されて行われたといいます。その不思議な誕生、インドまでの放浪と布教、熱狂的な女性信者がいて、祭りで悲劇が捧げられるユニークな神でした。このディオニュソス像のチュニックの着装者が、実は熱心なキリスト教信者であったのかどうかは、残念ながら確かめられません。

もう一度、模様全体を見て行くと、胸と背に大きな主文様を配置するオーソドックスなデザインです。その両端から裾に向かってクラヴィーという2筋の縦飾りが繋がっていて、10コマが縦に連結した帯状に、動物と裸体の男女が交互に嵌め込まれます。兎、アヌビス(山犬)、獅子の3種が横向きに走り、人物は段ごとに男女順が入り代わります。

右ページに掲げた大きな裂の左帯詳細を見ていただくと、なかなか愉快的な図柄でしょう。前後で21人(3人は欠失)もの人物たちが、周りに向かって一斉に手を振っているようで、楽しい雰囲気がしてきます。動物たちも、霜降り状のやや暗い地から天に向かって走っているようです。

縦飾りに登場する14人は一体、誰なのでしょう。ディオニュソスに当てた胸飾りの2人とは違ってキトンの着衣ではなく、クラミーというマントを首や肩に掛けるだけの裸体ですが、体の大きさも同じくらいで、身振りも変わりありません。ディオニュソス神は壺絵や彫刻で裸体表現されることもあるので、明らかな差異は、葡萄の房を手に行っているかどうかです。本作だけ見ていると、その正体が見えてこないため、他館のコプトコレクションを調べてみることにしました。

ギリシア文字のΠパイの形(コプト文字も同じ字形で発音ピ)にも見える胸飾りと縦飾りを組み合わせたスタイルは基本形としてよく出てきて、そこにディオニュソスがいると思われる作例をチュニックの分類で探してみると、ルーヴル美術館で7点、メトロポリタン美術館で2点が見つかりました。

①ルーヴル美術館収蔵品番号E28067 6-7世紀

胸飾りに5つ、縦飾りに左右で8つの壁龕に、ニンブス（光輪）を付けた男女神が、着衣で踊るような動きをしています。おそらくディオニュソス夫婦で、4人の男神は楯を持っています。

②同番号 29279 ビザンチン時代(5-7世紀)

裸体の男と着衣の女が楯を持ち、全員が天を見上げて歩く姿。人物の間には輪に入る動物が配置されています。

③同番号 MTC 8500 ビザンチン時代

胸飾りの中央の壁龕に着衣の男性が左手を挙げ、下げた右手に蔓を持つ。左右の組紐輪の中にクラミーをした裸体の男2人、1人は楯を持つ。

縦飾りに10匹の動物がいます。

④~⑦ 番号 E32284, E26140, AF5573, E13953の4点中には着衣の男もいますが、ほとんどは裸体の男が楯をもって、立つか歩いて並んでいます。

⑧メトロポリタン美術館受入番号26.9.8 5世紀

胸飾りの花丸4つの中に男が丸か四角の楯を持って立ち、両脇から縦飾りが続いています。胸飾りの下に半円が3つ連結して、葡萄の葉を付けた若木を差した壺がある所が要点でしょうか。裾飾りや肩の紋飾りなどもあって、装飾豊かです。

⑨同受入番号 26.9.9 5世紀

胸飾りの中央枠に裸の男女が右を振り向いています。ともに頭後にニンブスが輝いており、男は祭礼の杖テュルソスをもって、ディオニュソスと思われる。2人の両脇には海獣（イルカ）に乗るネレイデスたちが祝いに来ています。周りは輪の中の動物と葡萄唐草の葉で埋められています。縦飾りの男たちは楯、槍、剣を手にして、動物の進む天を見えています。



Metropolitan Museum of Art  
Tunic with Dionysian  
Ornament (portion) 26.9.9

以上、当館のディオニュソス文様チュニックの関連作品を見てきて、①と⑨のようにニンブスで明確に神格を表し、他の人物と区別した作例がありました。楯を持つ裸体の男は大人数の作例が多く、ディオニュソスとは思われません。彼らは従者であろうとの解説を見ましたが、ギリシア神話でディオニュソスの従者は一般的には、半人半獣のサチュロスと、熱狂的な信奉者マイナスです。

実は、右図本作の縦飾りの2段と6段目の人物の右腕が、

マントのクラミーが膨らんでいるのではなく、楯を真横から見た形にも見えます。ルーヴル美術館では間違いなく楯を構えた人が表され、それらと似ています。また、⑨だけは、男たちが、楯の他に槍と剣を持っています。コプト織文様には動物を仕留めるシーンはめったになく、獲物を持つだけですが、狩りをする人達と推定されます。

コプト織には騎馬の狩猟文様もあります。ササン朝ペルシアの銀鍍金狩猟文皿などにおける定型化した意匠から影響をうけています。しかし、コプト織の動物は、みな明るく牧歌的な雰囲気キャラクターをしています。

さらに、人物の表現も織りで曲線を自然に表わすには、大きめの文様単位が向くので、瘦身よりも童形のようになりやすく、そこに親しみやすさが生まれます。

面白いことに、前述した楯を持つ男とよく似た人が、別作品の縦飾りで、家畜の番をする牧人たちの中にいて、シュリンクス(パンパイプ)を吹く人の下に配され、タンバリン叩きの牧人と説明されているのです。持ち物の楯をタンバリンに見立てれば、村祭りの祝祭に変えられそうで、動物も憩う楽園のイメージが出来上がると思えたのかもしれない。

どうやら、狩人は牧人でもあり、ディオニュソス神の従者も務める名脇役であったのでしょう。それにしても、手を振ることの意味は何であったのか、1500年前のコプト人の気持を想像してみてください。

(久保木彰一)



## 行田の豪商大澤永之助の旧蔵品について

依田 徹

### はじめに

遠山記念館で所蔵する近世風俗画の重要作例「輪舞図」、そして尾形乾山「椿文小鉢」の2件について、大澤永之助の旧蔵品という来歴が明らかとなった。大澤家は江戸時代に忍藩(埼玉県行田市)で活躍した豪商であり、永之助は酒井抱一などと交流を持った江戸琳派の後援者でもあった。また「輪舞図」が当館に入った経緯は、特殊である。本稿ではこの2点について、大澤家との関係を中心に紹介したい。

### 1 大澤永之助について

まず大澤永之助について確認したい。忍城下の呉服商に大澤屋久衛門家があり、町年寄格という名家であった。18世紀末頃、当時の大澤屋久衛門(寿楽、?～1826)は、大坂において青縞の足袋を販売することで事業を拡大し、「東の大丸」と呼ばれたとされる。またその当時、大坂城代であった忍藩主阿部正由(まさより)に呼び出され、高齢でありながら遠地で商売を行うことを賞され、名字帯刀を許されたとされる。正由の話は大沢俊吉『行田足袋工業百年の歩み』に記録された、大澤家のオーラルヒストリーであるが、事実だとすれば正由が大坂城代であった、文化元年(1804)から同3年までの事となる。実際にこの時期より行田の足袋の名声は全国的に広がり、近代まで行田市の基幹産業となっていく。

この事業拡大を行った久右衛門の息子が、大澤永之助(1769～1844)である。大店の跡取りであったが、三十代で隠居して江戸浅草茅町に移住し、永之、日新齋、好文堂、百華潭などと号して風流三昧の生活を送った。その近隣に能書家の澤田東江が住んでおり、東江の伝手(ついで)で酒井抱一や亀田鵬齋(ほうさい)といった、文化人との交流を広げている。

永之助は江戸や行田に多くの足跡を残している。文政2年(1819)に鵬齋と共に、高輪泉岳寺に赤穂浪士を顕彰する「赤穂四十七義士碑」を建てたことが知られる。さらに同6年には、抱一も加わり江戸善養寺に尾形乾山の顕彰碑(乾山深省蹟)を建てている。

郷里の行田市には、享和元年(1801)に清善寺に

「法華経一千部読誦碑」を寄進しているが、その線刻画には抱一の関与が想定される。さらに天保7年(1836)に父久衛門の供養として、同様に清善寺に「釈迦如来」を寄進している。京都清凉寺の釈迦如来の精巧な写しであり、やはり僧侶である抱一が関係したのだろう。また八幡神社にも、抱一の高弟である鈴木其一の「神功皇后図」を寄進している。

### 2 尾形乾山「椿文小鉢」について

永之助のコレクションについては、後述する『大澤龍次郎翁伝』にリストが一部抄出されている。乾山の画幅だけで14点掲載されており、他に光琳、抱一が作品も多く、抱一の影響を受けて琳派作品を集めていたことが確認できる。乾山の陶器も16点掲載されており、その中の「色絵椿花形小鉢」に該当すると思われるのが、当館の「椿文小鉢」(図1)である。

尾形乾山(1663～1743)は京都の呉服商である雁金屋尾形宗謙の三男として生まれ、実兄に尾形光琳がいる。京都北西の鳴滝に窯を築き、野々村仁清の影響を受けて絵画性の強い色絵陶器を制作した。本作は素直な椀形で、器全体を緑釉で覆っている。掛け残して素地を白抜きにすることで白椿を表し、雌蕊には黄色の絵具を載せている。緑釉による白椿の意匠は、鮮やか



図1 尾形乾山「椿文小鉢」 17～18世紀  
高6.5 口径12.3 底径5.3(cm)

な色彩の対比が美しく、乾山が好んで食器に多用したものである。本作は緑釉の発色も鮮やかな優れた作例の一つで、高台の内側には、鉄絵により「乾山」の落款が力強く入っている(図2)。本作も当初は食器であったが、後世に茶碗に転用された。

外箱蓋裏には「百華潭藏」の朱文方印を捺した紙が貼られている(図3)。これが大澤家の蔵札であるが、形式から見て近代のものだろう。さらに内箱の蓋裏と側面には、古筆了信(1863~1946)による墨書がある。まず蓋裏の墨書を見てみたい(図4)。

この茶碗はむかし百華潭主の浅草の寓居にありし折この翁の作品なとあるを雨華庵主などのすすめによりて取入れたるものにて椿の絵などは其好める□をまのあたり見□□□也むかし語を聞たることを誌す

古筆了信

すなわち永之助が浅草にいた19世紀初頭、雨華庵主(抱一)の勧めで入手したという来歴が記されている。了信は抱一没後の生まれであり、大澤家に入出入りしてこの話を聞いたのだろうか。次に箱の側面の墨書を見たい(図5)。

千代かけてくわはや大きれ大福茶  
庚午歳重陽月信濃の長野之上野家ニ於而ふた  
たひ誌(花押)

文中にある「庚午」は、昭和5年(1930)を指す。実はこの直前の昭和3年、大澤久衛門家は売立を行っており、その目録『武州行田百花潭大沢家蔵品展観』には、本

作の写真が掲載されていた。

すなわちこの売立により長野県の上野氏が購入したのであり、上野家を訪れた了信が「ふたたび」書付を請われ、狂歌を記したのである。遠山元一が入手したのは、おそらく戦後のことだろう。



図2 尾形乾山「椿文小鉢(底面)」



図3 「椿文小鉢」外箱蓋裏貼紙



図4 「椿文小鉢」内箱蓋裏墨書

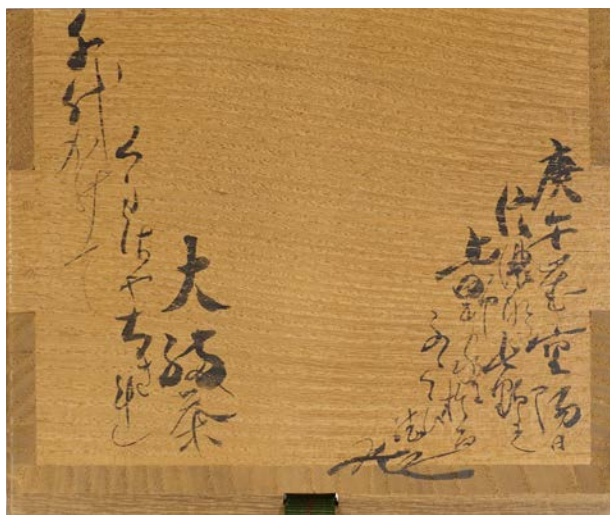


図5 「椿文小鉢」内箱側面墨書



図6 「輪舞図」17世紀

### 3 「輪舞図」について

もう一点、当館には大澤家旧蔵とする「輪舞図」がある(図6)。戦国時代から江戸時代初頭にかけて、祭礼などに奇抜な装束をした男女が輪になって踊る風俗が登場した。しばしば絵画に描かれており、本作もこうした輪舞図の系譜に連なる。

金地の双幅で、左幅には3人、右幅には5人、扇を手にした男女が身を様々な姿態で踊る姿を描いている。また左幅の中央には、太鼓と三味線を持つ人物が描かれており、この3人は舞の奏楽である。奏楽は円陣の中央で行われるものであり、本来はもう一紙分、左側に空間が展開していたはずである。本紙には金地の質が変わる部分があり、かなり損傷していた痕跡が確認できる。



左幅：106×51.3 右幅：107.2×51.5(cm)

すなわち現状より一回り小さな状態であった所から、修理の際に補ったのである。ここから本来は軸装ではなく、屏風などであった可能性も想定される。さらに子細に見れば、画面隅の人物の手先や扇、裾などにも、かなり補彩が施されている。しかし面貌の部分は繊細な表現が残っており、当初のものと見て良さそうである。

本作は箱が新調されているため書付はないが、後述の添状から岩佐又兵衛勝以(1578~1650)の作品として伝わっていたと確認できる。本作のような輪舞図が描かれたのは、まさに又兵衛の活動していた17世紀前半である。本作も人物の衣裳の身頃の幅が広くとられている点、またその文様表現から、この時代の風俗とみさせる。しかし面長の面貌など又兵衛特有の表現はなく、

異なる絵師の筆と見るべきだろう。こうした風俗表現から取り出された個別の人物像は、後の浮世絵へとつながっていき、本作は過渡期の貴重な作例となる。

本作の来歴であるが、先述の永之助コレクションのリストにも売立目録にも記載がない。しかし『大澤龍次郎翁伝』は本作を表紙に用いており、そのあとがきに「表紙は、大澤永之が愛蔵していたもので、今は先生(大澤龍次郎)が所蔵している有名な「舞踊図」を用いました」と記す。ここから本作も、大澤永之助の旧蔵品と判断する(大澤龍次郎については後述)。

さらに本作には、明治18年(1885)10月29日付けの、天野なる人物からの書簡が添っている。

皇后宮行啓ニ付御坐掛として、御蔵幅又平踊人物之図拝借、直ニ行在所へ貢出候處、即御用ニ相成、供奉官ニも大ニ賞賛せ候、我面目之事ニ有之候旨、掛り官より申越候、右御挨拶として縣庁より金式圓賜り候間、宜敷御領取相成度、茲ニ御蔵幅返上□此無申通候也

十八年十月廿九日 天野  
大澤様

この年の10月24日、昭憲皇太后が群馬県太田町(現群馬県太田市)の金山へ、松茸狩りに出かけている。汽車で上野駅から熊谷駅へと移動した昭憲皇太后は、熊谷直実ゆかりの熊谷寺(埼玉県熊谷市)を行在所(天皇皇后の休憩所)とし、昼食を採った。本作はこの時に、行在所の飾り付けに用いられたのだろう。書面を出しているのも、北埼玉郡長であった天野三郎と見られる。当時は忍町も熊谷町も、北埼玉郡域である。御坐掛を命じられた天野が、郡内の名士である大澤久衛門家から、飾り付け用の美術品を借りたのである。

さらに本作と関係のある作品として、「博多人形 元禄

踊」(さいたま市岩槻人形博物館所蔵)がある(図8、9)。8体組の人形で、像高が27~38cmという大き目の作品である。かぶり物をした男性の姿や、女性の姿勢の一致から、やや衣裳の模様に変化があるものの、明らかに本作を基に制作されたと認められる(図10、11)。その制作年代は明治時代から大正時代とされ、明治18年の行啓と合致する。美術品を天覧に供した際に記念品が作られる事例はあり、確証はないものの大澤久衛門家で依頼制作した可能性が想定される。

そして本作は、昭和期には大澤龍次郎(1887~1974)へと移動する。龍次郎も行田出身の実業家であるが、大澤久衛門家との血縁関係については不詳である。ただし龍次郎の父親である大澤新兵衛(1848~1912)は大澤屋の番頭であり、縁戚関係であった可能性はある。龍次郎は小学校を卒業後、14歳で上京して綿布を扱う安田商店の丁稚となり、やがて証券業に転身して大正6年(1917)に「大澤商会」(現株式会社SBI証券)を創業した。昭和4年には忍町に時警塔サイレンを寄付するなど、地元の名士となっていく。そうした過程で、久衛門家が家宝として残っていた「輪舞図」が、龍次郎の下へ移動したのだろう。

先述のとおり本作は『大澤龍次郎翁伝』の表紙に用いられており、刊行された昭和36年の段階では大澤龍次郎の所有であった。そこから遠山記念館開館の同45年まで、約10年の間に遠山元一(1890~1972)の所有へと変わっている。遠山記念館では大澤証券が苦境になった際、元一が援助して御礼として本作を譲られたと伝えられている。実際にこの間には昭和40年不況があり、その際に日興証券が大澤証券を助ける場面があったのだろう。元一と龍次郎は同世代の埼玉県人であり、地縁的な繋がりからも龍次郎の危機を救ったと思われる。なお博多人形は昭和期には西澤笛<sup>にしぎわてきば</sup>畝(1889~1965)のコレクションとなり、平成になってさいたま市の所有となっている。

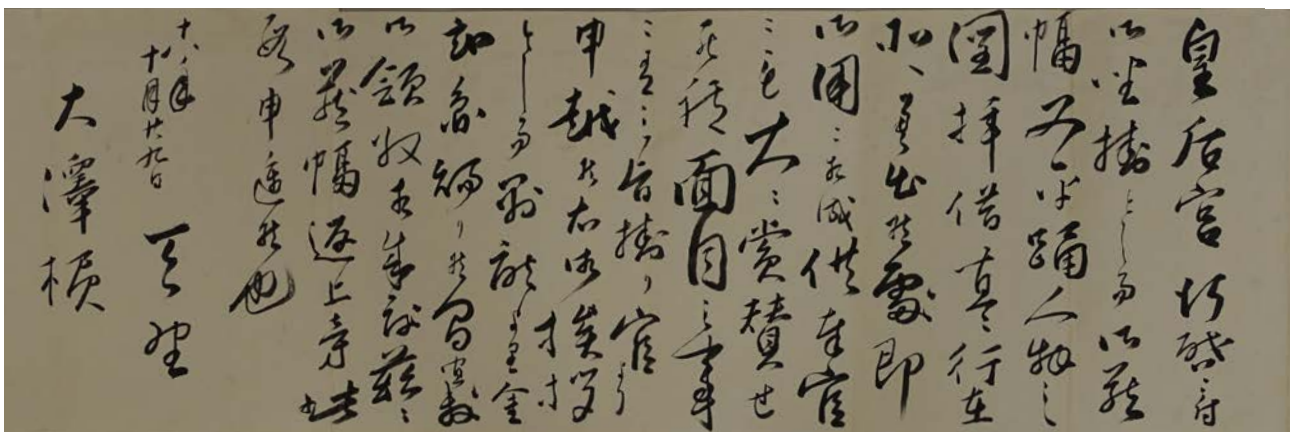


図7 「輪舞図」添状 高19.7 幅72.5(cm)



図8 「博多人形 元禄踊」さいたま市岩槻人形博物館



図9 「博多人形 元禄踊」さいたま市岩槻人形博物館



図10 「輪舞図(左幅部分)」



図11 「輪舞図(右幅部分)」

### 主要参考文献

- 大沢俊吉『大澤龍次郎翁伝』行田市役所、1961
- 大沢俊吉『行田足袋工業百年の歩み』行田足袋商工協同組合、1971
- 大沢俊吉『忍城物語：目でみる行田史』行田市役所、1973
- 『昭憲皇太后実録上』吉川弘文館、2014



テーマ展 「エジプト古代染織コプト裂100点」

-織り文様は何を表しているのか-

9月14日(土)～11月4日(月・祝)

コプトとは、2世紀末のころに広まったキリスト教に入信したエジプト人のことで、そのコプト人が織り、着装した麻と羊毛の綴織をコプト織と呼びます。エジプトの乾燥した気候が保存環境に適していたため、コプト織は朽ちることなく今日に伝えられてきました。日本の正倉院よりも古い1500年以上前に織られた、古代の染織品なのです。遠山記念館は、国内最大級の4792点のコプト裂を所蔵し、国内外ともに有数のコレクションです。コプト織は、もとは衣服や覆布、壁掛けなどで、19世紀末以降の発掘後、美しい文様の部分だけが切り取られて断片・裂となりました。織り出された文様にはナイル河畔の動植物が生き生きと写され、ギリシアの神々や英雄が躍動します。組紐文様、キリスト教図像も加わり、変化を見せながら流行しました。本展では、4～7世紀にかけてのコプト美術全盛期の作品を中心に100点を選び、それらの文様は何を表すのか、主題と象徴的意味を探ります。巧みな織り文様の意味を知るとともに、のどかな表現をお楽しみください。



「菱形包み組紐文様円紋飾」 4-5世紀



「アフロディテとアドニス」 4-5世紀



「キリスト降誕図」 7-8世紀



「兎とライオン 唐草文様」 4-5世紀

「エジプト古代染織コプト裂100点」関連イベント

・特別講演会「コプト時代の社会と人々の暮らし」

10月12日(土)午後1:30～3:30 講師：辻村純代氏(公益財団法人 古代学協会客員研究員)

エジプトコプト時代の遺跡発掘調査のご経験から、その時代のコプト人の暮らしを解き明かしていただきます。

・特別講演会「コプト織-文様とシンボルの饗宴-」

10月19日(土)午後1:30～3:30 講師：加藤磨珠枝氏(立教大学教授)

キリスト教美術研究者の眼から、コプト織文様のそれぞれが秘める、シンボルの意味を探っていただきます。

会場：遠山記念館事務棟地下会議室 対面式 (Zoom参加も可能) 定員：30名(先着)

参加費：各回500円(入館料別途) お申込み方法：当館公式サイト申込みコーナーから

## 「コレクション展2」

2025年  
11月23日(土・祝)～1月19日(日)

年末から年始にかけてのコレクション展です。遠山記念館の所蔵品の中から、新年の干支である蛇を象った金工作品である豊川光長「巳」をはじめ、「梅御所車蒔絵文台・硯箱」など、正月をお祝いするのにふさわしい絵画や工芸作品を選んで展示いたします。



豊川光長「巳」大正4年



「梅御所車蒔絵文台・硯箱」  
明治時代 19世紀



清水比庵「富士」昭和45年

## テーマ展「雛の世界」

2月1日(土)～3月9日(日)

江戸時代に開花した人形文化は、日本独自の雛人形を母体として、多種多様な人形を生み出してきました。本展では、雛人形を中心に江戸時代中期から昭和時代中期頃までの様々な種類の人形を展示し、日本の人形の歴史をたどっていきます。立雛(次郎左衛門頭)、享保雛、古今雛などの雛人形の他、嵯峨人形、御所人形、衣裳人形、賀茂人形、からくり人形、抱き人形、絹糸細工、郷土人形などを展示いたします。併せて会期中、遠山邸の大広間では、十畳の座敷いっばいに飾られた雛壇飾りもご覧いただけます。これらは当館の創立者である遠山元一が、長女 貞子の初節句の祝いとして、大正時代に揃えたものです。日本の人形が持つ魅力をご堪能下さい。

### 「雛の世界」関連イベント

- ・「雛祭りの日」ガイドツアー 2025年2月22日(土)・3月1日(土)・3月2日(日) 午後1:30～3:00  
会場：美術館・遠山邸 参加費：無料(入館料別途) 受付：当日午後1時30分に美術館ロビーに集合  
担当学芸員が「雛の世界」展と「遠山邸」を解説します。



「享保雛」江戸時代中期～後期



「立雛(次郎左衛門頭)」  
江戸時代中期～後期



賀茂人形「狐の嫁入り」江戸時代後期

## テーマ展「近代の日本画」

3月20日(木・祝)～5月18日(日)

明治維新によって、江戸時代の様々な制度はその形を大きく変えていきます。絵画においては狩野派などの家組織が解体され、学校で絵画が教授されるようになりました。特に東京美術学校では旧狩野派の橋本雅邦の門下から、横山大観や菱田春草らが育ち、西洋絵画の影響を受けた彼らの作品は、後に「日本画」と呼ばれるようになります。本展では遠山記念館の日本画の精鋭を並べます。



横山大観「耀八絃」昭和17年



川合玉堂「春峽」昭和32年



橋本雅邦「雪中金閣寺(部分)」明治32年

### これからの催し物

#### 遠山邸2階公開日

日時：9月21日(土)、10月14日(月・祝)

午前11:00～午後3:00

参加費：入館料のみ

通常非公開の遠山邸2階をご覧ください。昭和初期の雰囲気色が濃く漂う和洋折衷の応接室を中心に、庭園を一望できる14畳の座敷など見どころがいっぱいです



### 2023年度 催事報告

4月15日(土) 特別講演会 (Zoom開催) 「古代シリアの女神たち ―何を託され、祈られたのか―」

講師：宮下佐江子氏 (国士舘大学イラク古代文化研究所特別研究員)

4月30日(日) 特別講演会 (Zoom開催) 記念講演会 「ルーチョ・フォンターナのブロンズ像について」

講師：黒川弘毅氏 (武蔵野美術大学名誉教授)

10月 7日(土) 土曜講座 (Zoom開催) 「瀬戸焼と美濃焼の茶道具」

10月15日(日) 特別鑑賞会 「長次郎の黒楽茶碗を見比べる」

10月21日(土) 特別展瀬戸焼と美濃焼 記念茶会 (協力 埼玉大学茶道研究会)

10月29日(土) 遠山邸研究会 「遠山記念館 (旧遠山家住宅) 庭園の近代和風庭園としての特色と価値」

講師：粟野隆 (東京農業大学教授)

2024年

2月17日(土) 地域子ども教室 「子どものためのギャラリートーク」

3月 2日(土)・3日(日) 「雛祭りの日ガイドツアー」

## ●遠山家雛壇飾り

2025年2月1日(土)～3月9日(日)

雛祭りの季節に合わせ、遠山邸の大広間で十畳の座敷いっぱいに飾られた雛壇飾りをご覧ください。これは遠山元一が、長女貞子(大正9年生まれ)の初節句の祝いとして揃えたもので、京都御所の紫宸殿風の館に人形を飾る「御殿飾り」と、関東風の「段飾り」と二組で構成されています。「御殿飾り」は檜の樹皮で屋根を葺いた檜皮葺きで、すべて組み立て式になっており、また「段飾り」は七段で、特に五人囃子と隨身には日本橋十軒店の名工「永徳斎」の商標が付いています。



### ●ご来館のみなさまへ●

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、以下の点にご協力をお願いいたします。

- ・倦怠感、発熱、咳等の自覚症状のある方は、ご来館をお控えください。
- ・アルコール消毒にご協力をおねがいします。
- ・館内では、会話を控えめにし、周囲の方と距離を保ってください。
- ・作品、展示ケース、壁や柱などにはお手を触れないでください。

## 利用案内

### ◇入館料

	一般	学生
特別展	1,000円	800円
通常	800円	600円
美術館閉館時	600円	400円

※中学生以下は無料、団体20名以上は2割引き

◇開館 午前10:00～午後4:30(入館は午後4:00まで)

◇休館日 月曜日(月曜が祝日の場合は翌日)  
12月21日(土)～2025年1月5日(日)  
1月30日(木)～31日(金)、3月11日(火)

◇邸宅、庭園のみ公開(展示替期間)

11月6日(水)～11月22日(金)  
2025年1月21日(火)～1月29日(水)  
3月12日(水)～3月19日(水)

◇詳しい展覧会情報は下記をご覧ください。

URL <https://www.e-kinenkan.com>



### 電車・バスでのご来館の場合

- 東武東上線・JR埼京線 川越駅
  - 西武新宿線 本川越駅 ●JR高崎線 桶川駅
- いずれも「川越駅～桶川駅」間の東武バスで牛ヶ谷戸下車、徒歩15分

### お車でのご来館の場合

- 圏央道川島ICより7分
- 川越方面から国道254号線の宮元町交差点を川島方面へ右折、釘無橋を渡り最初の信号を左折、案内板に従って約10分

遠山記念館だより 第67号 2024年9月発行

編集発行 公益財団法人 遠山記念館  
編集担当 依田 徹

〒350-0128 埼玉県比企郡川島町白井沼675  
TEL: 049-297-0007 FAX: 049-297-6951